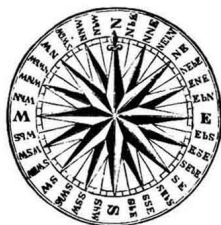


北へ行く旅人たち

川村たかし

——新十津川物語





偕成社の創作文学

北へ行く旅人たち ——新十津川物語

NDC 913 偕成社 246p 21cm 1978年

1977年12月 1刷

1978年5月 3刷

著者	かわ	むら	た	か	し
発行者	川	村	今	村	廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5
TEL (03) 260-3221 (代) 〒162
振替 東京5-1352番

本文印刷	新興印刷製本株式会社
多色印刷	小宮山印刷株式会社
製本	文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-720100-0904

©川村たかし 鵜田 幹 1977

Printed in Japan

北へ行く旅人たち

——新十津川物語

川村たかし／鵜田 幹 絵



偕 成 社

北へ行く旅人たち／もくじ

第1章 走りだした山やま

1 いかだ師の群れ 8

2 千本のはそびき 17

3 夜の異変 27

4 つづく地鳴り 36

第2章 赤い湖

1 こわれた天の池 46

2 湖が三十七 55

3 十津川武士 64

4 まよい 72

第3章 地の果てへ

1 ぞうりをはいた花嫁 82

2 遠征隊 94

3 小樽の朝 104

4 赤服の群れ 116

第4章 はじめての冬

1 仮らずまい 128



2	冬ごもり	138
3	最初の逃亡者 さいしやとうぼうしや	147
4	おいてきぼり	157
第5章	はるかな故郷 はるかさと	
1	川をわたる日	168
2	海底の小屋 こや	178
3	タモの木温泉 おんせん	187
4	二どめの春	196
第6章	開拓地の朝をあとに かいたくち	
1	スイカ弁当 べんとう	206
2	大どろぼう	217
3	舞う火の粉 [*]	228
4	スズメのくる日	237
	あとがき	249

作家と作品について 篠遠喜健
しのとおよしけん





作者・川村^{かわむら}たかし

1931 年, 奈良県に生まれる。奈良教育大学卒。
現在, 五條高校教諭, 日本児童文学者協会・日
本児童文芸家協会会員。主な作品には『川に
立つ城』『まぼろしのカステラ』『凍った猟銃』
『ふんどし校長』『熊野海賊』『ツチノコ探検隊』
『おてんばショコちゃん』『山へ行く牛』等多
数ある。住所／奈良県五條市新町 2-1-14

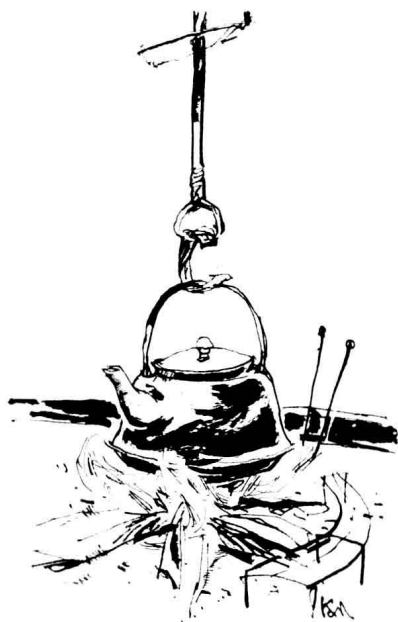
X 画家・^{とみた}鶴田^{かん} 幹

1932 年, 千葉市に生まれる。1959 年より田代
光氏に師事。新協美術会委員, 白礫会会員。
毎年, 油絵の個展, 同人展その他を持ち, 小
説文芸誌・新聞・児童誌等に主として歴史も
のの挿絵を描く。絵本には『まぼろしの城』
のほか多数ある。住所／千葉市南生実町 861

川村たかし

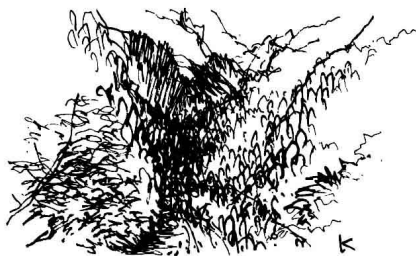
北へ行く旅人たち

——新十津川物語



第1章

走りだした山やま



1 いかだ師の群れ

夜の底^{そこ}から、いつものような男たちの呪文^{じゆもん}がきこえはじめた。

声は川の音といっしょにあがってきて、いちど消えてしまう。しかし、まもなくひくいつぶやき声^{がっしょう}が、合唱のように流れてくる。消えるのは山の曲^まがりかどにはいっているためだとわかっていても、フキはいくらか不安でじっとからだをかたくしている。

呪文^{じゆもん}がふたたびきこえだすころには、彼女^{かのじよ}はもうはつきりと目をさましていて、心の中でいっしょに声をあわせていた。あわせると、かすかだがからだ^カが右に左にゆれた。

オモ——オト——コガ——ウネ——サカ——コ
セ——バア——スズ——シイ——カゼ——フケ
——ソラア——クモ——レエー

フキが呪文^{じゆもん}の意味^{いみ}をしったのは、ずっと大きく

なつてからのことである。

へおもう男が畝坂こせはずしい風吹け空くもれへ

床の中でからだかゆれてくるのは、男たちの動作を見ているからだ。いかだ師たちはながい竹ざおを一本ずつ肩に坂をのぼってくる。まだ夜明けにはとおいので、おたがいの存在をはつきりさせなければ危険なのだった。

オモ——オート——コガ……

というふうに、わらじの足をふみしめふみしめ一列になつて歩く。おなじリズムで曲がりくねつたほそい山道をたどらなければならぬ。そのとき、調子がくずればうしろの竹ざおがぶつかつてくる。人と人とのあいだはとおいのに、一本の竹が闇の中にもさしのようによこたわつていた。そんなとき、彼らは歩き小便というのをやる。ひとり立ちどまれば全体が停止しなければならない。とまればそれだけ仕事におくれることになつた。

歌声がきこえはじめると、父の莊一郎と兄の照吉はおもてに出てまちうけている。それから行列の尾につくと、やっばりきみような呪文をとえながら、坂をのぼつていった。フキはその声をおくつてなんとなく安心し、もういちどふかい眠りにおちていく。

だが、その日はようすがちがつていた。歌声が家のまえでびたりとやんだのである。

「どうじゃろうなあ。」

と、外の声がきいた。

「くるかもしれんのう。」

莊一郎はせまい谷の空を見あげるぐあいだ、

「風に水のおいがするわい。それに、ぬりつぶしたようなべったり雲も氣にいらん。もしかしたら大雨がくるかもしれん。」

「ん、雨はほしや、米買、金もほしやというところだな。これはこまった。」

そう答えたのはどうやら中崎菊次で、

「よわりもうした。」

テンと音をたてて水ばなをかんだ。

雨になればいかだ師たちは仕事を休む。上流でにわか雨でもふれば、川は鉄砲水になってけだつてくる。足場がすべる日は危険だから、毎日が空もようと相談しての仕事だった。

フキはいつもとようすがちがうので、居間に出てみた。土間に寄っていろいろがきつてある。いろりのそばで姉のたつのがひぎの上にあごをのせてすわっていた。母のむめはへめつぱとよぶ弁当箱を二つだいたまま、どうしたものかと男たちを見くらべていた。しきいの外にはももひきすがたの兄が腕をくみ、父はひょこひょこ戸口を出入りしている。思案にくれているらしい。へことほしとよぶ小さな灯が、家の中のこいかけをゆさぶる。

「雨となれば雨よろこびをせんなんほどやがのら。」

莊一郎はもういちど空をふりあおいだ。見えないが雲の上に月があるらしい。山ぎわの空がほ

んのりと白い。びっしりとあつい雲の下を、べつの黒雲が足ばやにいそいでいく。

外にいるみんなが莊一郎のさしずをまっていた。それでも、那知合六人のいかだ師のリーダーはまだ決しかねた。

「どうだろう菊次さん。」

やせて目の大きい菊次はふうっとため息をついた。

「雨だけならともかく、これはどうもうしろに嵐がいるようだ。」

菊次は陽気にいつてから、ガツとつけくわえた。

「あかんぞよ、きょうは。」

「ふむ、わしもそう見る。」

莊一郎はやつとふんぎりをつけた。

「みな衆、骨休めじやい。」

「てっ。」

とがった声が外できこえた。

「また骨休めかい。」

前谷芳松という若者だった。

「盆じゃ、踊りじゃ、骨休めじやとこれではかせぎにならないのら。」

たしかに、七月からほとんどつめて仕事に出たことがない。八月一日の八朔をへ踊りじまいへ

とするとところもあれば、このへんのように芋名月の十五日までおどっているとところもある。山向

この重里村などでは川原でおどったが、山がけわしいこの谷では塩崎や中垣というひろい家の
畳をあげておどった。山がきゆうなので適当な広場がないせいだった。

踊りをやめて畳をいれたのはまだ二、三日まえだというのに、こんどは雨か。芳松はきげんが
わるかった。

「そうときめれば、ま、茶でものんでいけ。」

莊一郎は家の中へはいった。だがあとにつづいたのは菊次だけで、反対に息子の照吉は外へ
出た。

「芳松よ、いまごろかえって、家で弁当ひらくわけにはゆくまいしら。」

照吉がおおるようなことをいうと、なぜやらないわらい声がおこった。

「そうや、せっかくきたのや。おらいつてみよう。」

芳松はいちど立てかけた竹ざおをとあげた。七、八メートルもあるさおは、いかだの上から
岸につっぱり、材木を流れにのせるためのたいせつな道具だった。と、もうひとりがおなじよう
にさおをとった。見ていた照吉がむめの手からめ、つばをひとつだけもぎとった。

「よし、おれもいこう。」

三人おれば一連のいかだをこぎくだっていくことができる。

若者たちはすぐ闇にのみこまれたのに、もうあの呪文はきこえてこなかった。暗闇の中にすうつ

と消えた兄のうしろすがたを見おくりながら、フキはなんとはなしにぶるっとふるえた。そういうばけさはひえる。

あとにのこった荘一郎と菊次は、いろいろのそばにはいあがった。

「平作よ、まあすわれ。」

菊次はじぶんの家のような顔で、

「なあに、連中が小森峠をこえて上野地におりるころは雨じゃけ。」

「そやろかな。」

「ほに、おまえはみれんがましい顔をしてよ。このうんつくめ（ばかめ）。なにかね、手ぶらでかえれば嫁さんにしかられるとでもいうのかえ。」

平作はすすけた顔をあげた。

「いいや、とっけもない。」

それでもまだ菊次がいたずらっぽく目を



ひからせている。莊一郎が口をはさんだ。

「いじめてやるな。やつはいまきつと相つわりじゃけ。」

茶をいれていたたつのが、うっとのどを鳴らした。菊次ははじけるようにわらいだした。フキは目をくりくりさせて、まるい顔をかたむけている。アイツワリの意味がわからなかった。

「あつはつはつはつ、そうかい。それでおまえはこのごろ元気がないのか。」

菊次はひとり、

「それでやにこい（いくじがない）のか。」

と、うなずいている。

むめが娘のいれた茶を平作のまえにおいた。

「わらいごとじゃないといいなされ。ねえ。」

平作は同情されて、ますますこまってしまう。あんまりほめた話ではなかった。

若いいかだ師の嫁が重里村から山をこえてやってきたのは、春のおわりごろだった。その花嫁がみごもった。つわりになったとき、おなじような兆候が婿どのにも感染していた。これを十津川筋ではへつわり分けともへ相つわりともよんだ。ぼかんとして仕事の手につかない。ひどい者になると、妻とおなじように食物がのどをとおらなくなる。ときには熱まで出た。

「そうかそうか、なあにはじめての子のときは十人のうち八人までかかるそう。それはめでたい。」

菊次は湯のみをとりあげる。

「それもな平作よ。ほれた嫁にはよけいひどいそうな。わしなんぞは貧乏ひまなだから、長男の農太郎のときもなんともなかったが——」

平作はまぶしそうに姉妹のほうをふりかえった。たつのはもじもじし、フキは首をすくめてにこにこした。

「はいたら平作さん、うれしいのう。」

「これこれ、フウちゃんまでひやかすのかい。」

「ううん、おれはひやかしてへんよ。よかったいうてんのや。」

平作はくりくりうごくフキの目を見ながら、

「おおきによ。」

ぺたっと首すじをひとつたいてみせた。いろりの火が高くなると、むめはことぼしの灯を消した。

「菊次さんに相つわりがわかってたまりますかい。嫁さんがきてからもてんと家におちつかんじやったもんな。わけがちがいます。」

「おやおや。」

「いえね、うちにはふたりの女の子がおるんやさけ、嫁にやるとしても平作さんのようなおぼこい婿さんがこのもしいということすわ。」